

-地域と大学を結ぶ- りえぞん No.13

編集発行：武庫川女子大学 教育研究社会連携推進室

充実する本学の地域連携活動

本学では、社会連携の活動が次第に数を増し、また継続的な活動も行われています。その中の際立った活動の概要を以下に紹介します。

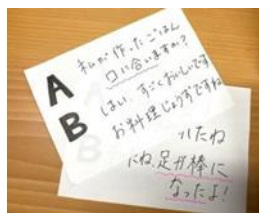
【 日本語日本文学科 】

インドネシア人日本語学習者の教室を訪問しました

11月、介護福祉士候補者として日本語を学ぶインドネシア人と交流を行いました。今回交流したインドネシア人は、日本各地の施設等で働き国家試験合格を目指す、日本にとって貴重な介護人材です。

本学から18名が訪問し、グループに分かれて自由に会話をしました。交流後に武庫女生が話していたのは、何よりも皆さんが本当に熱心で、話したことをすぐにメモしてくれたことが印象的だったということ、日本語が上手で、会話中もお互いに伝え合って楽しくお話しできたということです。

対面での交流は本当に久しぶりで、インドネシアのことも知る貴重な機会となりました。もうすぐ研修が終わるとのことですが、その後のお仕事、頑張ってください！



【 教育学科 】

子育てひろばのクリスマス

地域貢献の一環として、「子育てひろば」では2歳以下の赤ちゃんとお母さんに楽しく安全な遊びの場と子育ての支援をしています。学生もボランティアスタッフとして、大学で学んだ様々な遊びを実際に子どもたちの前で披露したり、お母さんからお話をうかがったりしてよい経験を積んでいます。



【 健康・スポーツ科学科 】

学生が婦人科受診啓発活動企画に参加しました

本学科の3年生が株式会社 azuki 主催「学生たちの婦人科ツアー」に参加しました。この企画は本学スポーツセンターと共同研究を行う同社が本学において実施した調査にて、学生アスリートの月経トラブルの解決法としての婦人科受診の選択率が低かったことから、本学の学生たちがもっと婦人科を身近に感じ「困ったら婦人科」となるような啓発を行うことを主旨としています。

レディースクリニックサンタクルス ザ シンサイバシで行われた本企画には、健康・スポーツ科学科から女性アスリートのコンディションを分野とするゼミの学生と体操部の学生が参加しました。診療室にて婦人科医から診療器具を用いての解説を受け、婦人科三大疾患や、HPVウイルス、服薬、月経管理などについて臨床的な理解を深め、現状の問題点の意見交換をしました。参加学生たちはこの経験と学びを活かし、女性アスリート、および婦人科受診について学内で啓発活動を行います。



【 生活環境学科 】

まちづくりコースの学生が香川県土庄町のまちづくり提案を行いました

本学科まちづくりコースの「フィールドデザイン特別演習」の授業で、地域の課題や魅力を調査・分析し、豊かな暮らしにつながる企画・提案を行いました。

本演習は、大学と包括連携協定を締結する土庄町（香川県小豆島）の協力の下、現地での宿泊を伴うフィールドワークも含めて実施することができました。

フィールドワークでは、農業や生産業、観光業関係者、集落の拠点づくりや伝統文化の継承に取り組む住民にヒアリング調査をしました。学生は調査結果を基に、交通問題の解決や仕事の創出、島内外の交流の促進などのまちづくり提案を行いました。

2月の授業最終回の講評会では、オンラインで土庄町役場やNPO法人トティエの職員、ヒアリング協力者に向けて、各自のまちづくり提案をプレゼンテーションしました。学生の提案を聴いた参加者の間では、活発な意見交換が取り交わされました。



【 情報メディア学科 】
**「日経 SDGs フェス大阪関西」のトークセッションに
 情報メディア学科の福井哲夫教授と國仙紗也香さん
 (3年)が登壇しました**

令和5年2月に「日経 SDGs フェス大阪関西」のトークセッション「学びのちから」が開催されました。日本経済新聞社とダイワボウ情報システムが「10年後の未来を見据えICTを活用した教育を考える」をテーマにしたセッションで本学科の福井教授と3年生の國仙さんが登壇しました。

このトークセッションは、「ICTが1人1人の学生の創造的な思考や考え方を育む～誰もが、いつでもどこからでも、誰とでも、自分らしく学べる社会の実現に向けて～」をテーマに、日経BP総合研究所上席研究員の太塚葉さんの司会で進められました。

福井教授は、人にやさしいコンピュータとの対話技術を研究テーマにしており、「ITによりSTEAM教育を支援」の内容について説明しました。

國仙さんは、グラフ作成ツール「MathTOUCH グラフ」による高校数学向け学習教材の研究開発を行っており、ICT、AIを用いて子どもたちが授業で積極的に発言しやすい環境(教室)をつくり出すアプリ「こんぱす」の提案内容を紹介しました。

また、同じ学科内のゼミと共同で「おふくもちチーム」を結成して日経STEAMゼミに参加した学生は、その成果について「コロナ禍の学生生活で、一つでも頑張ったと言える経験を作りたくて参加した。日経STEAMゼミでは、STEAM教育、国やOECDの教育方針など教育環境の変化に意識を向けて、深く考えることができた」と振り返りました。

※日経STEAMゼミは、ICTを介して多様な能力を育成できる環境とはどのようなものか、学生と未来の学びをともに考えながら、その可能性を探る活動を行っています。

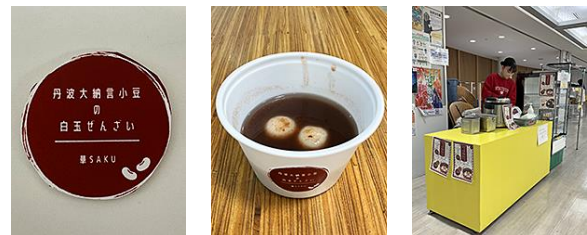


**丹波県民局の依頼で「食文化ツーリズム」に参画
 しています**

「丹波の食」を楽しんでもらい、地域の四季を通じた活性化を進める「食文化ツーリズム」への参画依頼を受けて、大森ゼミが丹波地域の食をテーマとする旅行商品を開発しています。

5つの食材(デカンショ豆、有機野菜、丹波茶、いちご、ブルーベリー)と農家民宿体験についてマーケットリサーチとフィールドワークを行い、更に旅行プランの実装に向けて検討を重ねています。

フィールドワーク中にお世話になった農家の丹波大納言を使った白玉ぜんざいを学内食堂で販売し3日間で限定300食を売り上げました。



【 食物栄養学科 】
**尼崎市の子ども食堂で、教育学科、日本語日本文学
 科のゼミと協働して「美味しい漢字教室」を開催
 しています**

尼崎市の子ども食堂(モコモコ倶楽部)で、教育学科、日本語日本文学学科のゼミと協働して「美味しい漢字教室」を開催しています。

2018年から教育学科のゼミがモコモコ倶楽部の運営のサポートを行っていましたが、昨年春、3学科による合同訪問を開始しました。今はまだ、感染対策に配慮しながら子どもたちと交流しています。

「美味しい漢字教室」は、遊びの中で子どもたちに漢字や食に興味を持ってもらおうと、3学科の知見を活かした食育教材を学生が合同で作成します。食事を待つ間、学生は食材に関するクイズを紙芝居のようにして子どもたちに出題します。蛸なら「足が8本あるよ」、林檎なら「シナノスイートなどいろんなニックネームがあるよ」などとヒントを出し、正解した子どもには、漢字とイラストを描いた缶バッジをプレゼントします。缶バッジは学生らが

デザインし、専用のメーカーで子どもたち自身がバッジを作成します。

11月の子ども食堂では、午後5時ごろから小学生が続々と訪れ、学生とクイズやバッジづくりを楽しみました。この日のメニューはおにぎりと天ぷらうどん。学生は進んで配膳を手伝い、子どもたちが食べる様子を見守りました。



【 食創造科学科 】

本学科3年生が神戸市中央卸売市場で本場のインターンシップに参加しました

本学科の学生4人が、神戸市中央卸売市場 本場のインターンシップに10月の5日間参加しました。

神戸市中央卸売市場本場と食創造科学科は、2021年に事業連携協定を締結しました。参加学生は早朝から水産や青果のせり見学、水産仲卸店舗の業務体験、食品衛生検査所での実習、西部市場を含む施設見学、その他市場内の事業者などの役割を学びました。

同学科では「インターンシップ」の授業で、履修内容に沿って学生一人当たり企業2社のインターンシップに参加します。食産業に関するさまざまな施設を見学し、多種多様な業務を実地で知ること、自己の適性や将来設計について考え、学習・研究への意欲を高め、産官学連携による即戦力を育成しています。



【 建築学研究科 】

大学院生が授業で甲子園会館のライトアップに取り組みました

上甲子園キャンパスで院生12人が授業の一環で甲子園会館を約150の投光器で照らし、幻想的な外観を浮彫りにしました。

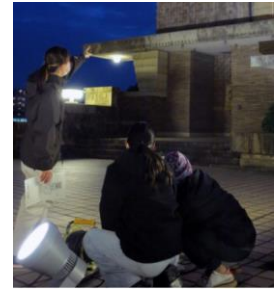
12月の金曜日、日没から20時までライトアップを実施。甲子園会館は窓が小さく、壁面が多いのも特長です。その壁面にはボーダータイルや装飾タイルをはじめ、アールデコのレリーフ、その他様々な装飾があり、ライトで陰影ができるといつもとは異なる

奥深い複雑な表情が見えてきます。

建物だけでなく植栽も。景観建築学の院生と学部生が外周道路に沿った寄せ植えをライトアップしました。2本のヒマラヤスギの枝に200m弱のライン照明を飾り、さらに大樹の幹の下から、手の届く範囲にライトを当てて、一味違うツリーに仕立てました。

建築学部の岡崎学部長は「ライトアップで、建物の設計の巧みさがより理解できるようになります」とその教育効果を指摘します。

また、CGで甲子園会館をライトアップした約3分の動画を作成し、実写編と合わせてYouTubeに同時公開しました。動画の中では修復作業中の東棟をはじめ、建築スタジオなど他の3つの建物もライトアップし、敷地の外周をめくりながら幻想的に浮かぶ上がる上甲子園キャンパスを楽しめる映像です。



【 音楽学部 】

逆瀬川グリーンハイツ自治会主催のコンサートに学生が出演しました

宝塚市の逆瀬川グリーンハイツで10月、「宝塚グリーンハイツミニコンサート」（同ハイツ自治会主催）が開催され、音楽学部の学生が出演しました。

コンサートは、第一部「創作ミュージカル『ヘアスプレー』」、第二部「フルートとピアノによる演奏」の二部構成で開かれ、会場から温かい拍手をいただきました。演奏の機会が減っている中、学生にとって貴重な機会となりました。

出演した学生からは「今回の演奏会では、演奏者と会場と一緒に手拍子をして盛り上がることができ、聞き手の表情や反応を直接見ることもできました。演奏する楽しさ、伝わるものの大きさ、会場の一体感など生演奏の素晴らしさを改めて感じました。」や「自分でプログラムを組み、トークをしながらの演奏は初めてでしたが、聴衆が温かく迎えてくださり、とても楽しい演奏会になりました。貴重な経験ができてよかったです。」というコメントが聞かれました。



【 薬学部 】

低学年対象の「有償制インターンシップ」を今年度からスタートしました

薬学部では学生が薬剤師や医療事務員の業務を早期から身近に感じられるよう、低学年対象の「有償制インターンシップ」を今年度からスタートしました。

薬学科は学びの期間が6年間と長く、薬剤師国家試験に向け、学びの意欲維持が重要なポイントです。また、健康生命薬科学科の卒業生に対して、薬局で活躍する医療事務員としての求人ニーズが高まっています。このため、1～3年生を対象に、早期プロフェッショナルプログラムを設定。2022年度から複数の薬局やドラッグストアと提携し、有償で研修を受けています。

学生は「患者に丁寧に服薬指導をする姿を見て薬剤師はすごいと思った」、担当した田内教授は「学んでいることが現場で必要であると実感でき、向学心につながったようです」と話しています。



【 健康生命薬科学科 】

武庫女スマイルフェスに「薬学部生のハンドサロン」 として参加しました

2023年2月にららぽーと甲子園にてららぽーと甲子園との合同イベントである「第5回 武庫女スマイルフェス」があり、本学科の化粧品科学研究室の学生が「薬学部生のハンドサロン」を開催しました。

今回は化粧品科学研究室で行われている「ものづくり研究」で誕生した創製品の第一弾「MUKOism うるおいパッククリーム」を使用してハンドマッサージを行い、参加者にそのクリームをプレゼントしました。

約150名の参加者があり、ハンドマッサージの施術にリラックスされている人や、施術後の効果に驚いている人もいて、皆嬉しそうに帰る姿がとても印象的でした。「また開催するときはあれば必ず来ます！」と言う人もいて、施術学生にとっても貴重な経験でした。

また会場ではこれまでにものづくり研究で誕生した「うるおいパッククリーム」の他に、第二弾で誕生した日焼け止め「MUKOism UV clear gel」も展示し、注目されていました。当日は現在開発中の第三弾の

化粧水についてのアンケートを行い、お客様から「誕生を楽しみにしています」という期待のお声もありました。今後も喜んでもらえる研究に励みます。



【 看護学科 】

3月に、ららぽーと甲子園で「まちの保健室」を開催しました

会場のららぽーと甲子園に設置しているポスター等を見た人など、73名の参加者がありました。

今回は「骨の健康度測定」「血管年齢測定」「ベジチェック®」「健康相談(血圧測定)」と西宮市薬剤師会による「おくすり相談」を実施しました。

「ベジチェック®」は推定野菜摂取量を測定するもので、前回の8月から取り入れていますが、前回も参加され、「今日のために野菜摂取量に気をつけてきた」という人もいました。

当活動での健康指標の測定や健康相談が、参加者にとって普段の食事や運動等を振り返る良い機会になっているようで、とてもうれしく思いました。

「参加して良かった」「受診の良いきっかけになりました」とのお声も伺いました。まちの保健室を通して、地域の皆さまの健康な生活のために少しでもお役に立つことができればと思っております。



【 経営学科 】

女子教育支援 ～SDGs リユース活動を通じて海外の女の子を支援するプロジェクト～(高橋ゼミ)

途上国の女子は「女の子だから」という理由で社会的地位を低く見られ、普通の生活を送ることすら困難な状況に置かれています。12～18歳の時期に生活の困窮から家族を救うため、早すぎる結婚や出産を強いられています。また、教育機会も奪われるため、社会に出て得られるはずの収入がありません。私たちは、「私たちが経験してきた青春をプレゼントしたい」という思いのもと、「女の子だからこそ」教育を

受け、世界を変える力へととなるべく、寄贈品の回収で寄付活動を行い、女子教育支援を行おうと活動を始めました。

女子教育支援プロジェクトは、寄贈された不要品を株式会社テイツーが換金し、その資金をプランインターナショナルが「ベトナムの早すぎる結婚・出産」で教育機会を失う少女の支援に役立てるというものです。今年度は、寄贈点数 800 点以上、寄贈金額 71,545 円を集めることができました。

このプロジェクトを通して、①現在世界中で女性活躍が推進されている中、今回焦点を当てたベトナムでは女性活躍を推進するどころか女性差別を受けています。この現状認識なしでは格差を埋めることができないと思いました。少しでも多くの人に女子教育の現状を知るきっかけになることができればこのプロジェクトを行った意味があると感じます。②企画・運営を行う中で、プロジェクトのテーマに合った寄付先を探すことや寄贈品目の選定、効果的な宣伝を行うなど1から考え、取捨選択をしました。広報の仕方や寄贈品の集め方を常に考え、不断の改善の大切さを学びました。

寄贈者、株式会社テイツー、鳴松会、プランインターナショナル、高橋先生と多くの協力者によりこの活動を終えることができました。

今回、企画・企業調整・運営・支援に携わり、プロジェクト推進の困難さや達成感を感じることができました。この経験を活かし、次の支援につなげていきたいです。



洲本市の「菜の花エコプロジェクト」にコラボしています

経営学部神栄ゼミは、淡路県民局からの活動助成を受け、洲本市の「菜の花エコプロジェクト」でコラボしています。使用後の菜種油を回収し、バイオディーゼルとしてリサイクルする SDGs 活動と、菜種油を使った商品開発やマーケティング、広報支援などに関わっています。開発商品の認知をどう広げて商品購入につなげていくか議論を重ねたり、実際

に菜の花畑の収穫を手伝ったりしながら、SDGs とリアルな活動をリンクさせつつ取り組んでいます。



丹波県民局の依頼で「食文化ツーリズム」に参画しています

「丹波の食」を楽しんでもらい、地域の四季を通じた活性化を進める「食文化ツーリズム」への参画依頼を受けて、山下ゼミが丹波地域の食をテーマとする旅行商品を開発しています。

ターゲットを関西在住の大学生とし、「カラーのある思い出づくり～丹波・但馬での思い出で何か人生を彩ることができるように～」をコンセプトにいくつかの旅行プランの素案を作成しました。

今後、ツアープランのブラッシュアップ、販売促進活動及び価格面について検討していきます。

丹波大納言大豆の魅力発信プロジェクトに参画しました

西道ゼミが「丹波大納言大豆ブランド戦略会議」（丹波県民局、丹波市等）と連携し、同小豆の食材としての魅力やスイーツを紹介するリーフレットを作成しました。

地元のお菓子業者の「ぜんざいフェア」の中で丹波大納言大豆を使った「丹ぶらん」を2月中旬まで販売しました。



【 武庫川女子大学 】 イトーヨーカドーと共同開発した「カラダがよろこぶ彩りデリランチ弁当」が発売中です

本学とイトーヨーカドーによる「コラボお惣菜レシピコンテスト」（協賛：旭松食品株式会社、株式会社日本アクセス）でグランプリを受賞した食物栄養学科の上東さんのレシピを取り入れた「カラダがよろこぶ彩りデリランチ弁当」が、9月末から関西のイ

トーヨーカード7店舗で販売されています。

コンテストのテーマは、日本古来の健康食材である①高野豆腐、②切り干し大根などの乾物を使用して、体と心が満たされる健康弁当を提案すること。上東さんは、個々のお惣菜と全体のバランスをきめ細かくデザインし、テーマに合った提案をしました。

上東さんの提案をもとに完成したデリランチは、高野豆腐を細かくカットしてキッシュ風卵焼きの具にしたもの、おからを使ったポテサラ風、大豆ミート入り豆腐ハンバーグは外はかりっとして甘辛く、中はしっとりして食べ応えがあります。ほかに赤魚の塩麴焼き、にんじんしりしり。各々が4つに仕切られ、2か所にはもち麦入り雑穀ご飯を盛り付けています。

本学最寄りの甲子園店の泉谷店長は「ヘルシー志向の弁当でこれほど売れるのは珍しい。キッシュの黄色が目を引き、食欲をそそります。ボリュームもあり、男性でも十分食べ応えがあります」と評価します。

販売期間中、上東さんと前田教授や学生、ゼミのOGが売り場を訪れました。上東さんは「メインテーマの高野豆腐は和食のイメージがあるので新しい風を吹き込もうと洋食のキッシュにアレンジし、他のおかずも彩りとヘルシーさを心がけました。好評で本当にうれしい」と感激した様子でした。



健康運動科学研究所が芦屋市保健センターのヘルスアップ事業に参加しました

健康運動科学研究所が、包括連携協定締結先の芦屋市保健センターのヘルスアップ事業に参加し、健康関連項目のからだ測定会を9月末から3日間、340名の幅広い年齢層を対象に実施しました。

芦屋市民の各ライフステージにおける横断的な測定を実施して健康増進事業の効果を検証しました。

この事業にあたっては、健康運動科学研究所の森田所員が、本学の教育研究社会連携推進室の支援事業「地域を対象とした連携推進支援事業」に採択され、「ライフステージにおける地域住民の健康調査に関する横断的研究-芦屋市ヘルスアップ事業との連携における検討-」として実施しました。本事業は、芦屋市と奈良女子大学、本学の共同研究です。

ゼミ生も積極的に市民と交流していました。来年の2月にも、測定会を実施予定です。今後も学内外との共同研究をできるよう活動してまいります。

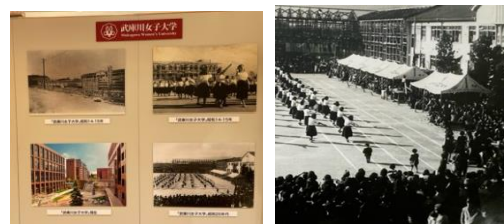


西宮阪急で武庫川女子大学の懐かしい写真が展示されています

オープンから14年を迎えた西宮ガーデンズの西宮阪急2階イベントスペースで11月に開催されている特設展「TSUNAGARU NISHINOMIYA～昔から今をつなぐ写真展 in 西宮阪急～」で、武庫川女子大学の写真が展示されています。

展示は大正、昭和初期の西宮の風景を写真や映像で振り返る内容で、武庫川女子大学からは建設中の武庫川高等女学校や、戦災復興中の校舎の前で体操をする生徒の様子など4点を展示しています。

会場では、西宮ガーデンズの敷地にかつてあった西宮球場や、西宮ヨットハーバーを拠点に活躍した「西宮海洋少年クラブ」の子どもたち、西宮北口駅が営業を開始した当時の懐かしい通勤風景なども見ることができます。



「被災や復興の体験から未来へつなぐ」をテーマに、西宮市・鳴尾連合自治会と防災勉強会を開催

本学が主催し、鳴尾連合自治会が後援する防災勉強会が12月に開催されました。これは大学の知的資源を社会還元するものとして2018年度から開催されており、今回は53名の参加者がありました。

勉強会は「被災や復興の体験から未来へつなぐ」をテーマにし、第一部では東日本大震災に関わる3名(小学4年時、石巻市で被災した澤田さん(健康・スポーツ科学部学生)、震災後石巻市と交流を続けている吉井教育学部准教授、西宮市職員で震災復興のため女川町に派遣され、現在も交流を続けている福嶋さん)が、各々の経験を基に課題等を語りました。

第二部では、鳴尾連合自治会で防災ガイドマップの作成など地域の実情を踏まえた取り組みを進めている小松地区の樋口さんと高須地区樹のまち自治会の島田さんが活動報告を行った後、西宮市地域防災

支援課長中尾さんと、気象予報士でもある福嶋さんも加わって、今後の地域防災につき議論しました。

全体の企画・進行をコーディネートした教育研究社会連携推進室長の大坪明特任教授は、「東北での体験や、地元での一部の取り組みを鳴尾地域で共有することができて参考になったことと思う。今後とも続けていきたい」と述べました。



【 社会連携推進課 】

地域連携協議会を開催しました

地域連携協議会にて、本学教員が地域連携活動の報告を行いました。

また参加する自治体、企業、および地域住民の本学に対する意見や要望を聞く場としても開催しました。今年度は5人の教員が、「地域連携に係わる活動」を報告しました。本学または大学の地域連携活動に関心のある人々に参加を呼びかけました。

本学教員の報告は以下の通り。

「地域にある小学校と大学が連携した学習支援活動のセカンドステージ」 (神原一之教育学科教授)

「打出教育文化センターの地域拠点化に向けた提案」 (伊丹康二生活環境学科准教授)

「ライフステージにおける地域住民の健康調査に関する連携活動ー芦屋市ヘルスアップ事業との連携における検討ー(森田彩健康運動科学研究所嘱託助手)

「モダニズムと交差する土地の記憶」

(黒田智子生活環境学科教授)

「地域貢献を通じた管理栄養士・栄養士としてのコンピテンシー獲得のための養成カリキュラムの提案」 (大滝 直人食物栄養学科教授)

「ひょうごSDGs オープンイノベーション」プロジェクトスタート・フォーラムに参画しています

関西・大阪万博開催を契機とした大学連携の新しい実証の場として、「ひょうごSDGs オープンイノベーション(以下HOI)」が発足しました。

本発足にあたり、兵庫県下大学の担う役割や、地域連携の新しい形について意見交換し、HOIによるSDGs推進と万博に向けた展望をフォーラムから発信したいと考え、学生及び教職員に参加を呼びかけました。

本フォーラムでは、本学放送部が総合司会を務め、設立趣旨説明と神戸市、経済団体の講演に続き、参画大学の特色と、地域活性および環境問題に取り組む学生団体の取り組み事例を紹介しながら、SDGs推進と万博に向けての展望について意見を交換しました。

ビジネスアイデア・コンテスト

地域を元気にする方策としてのモノやサービスを提供する起業を促進することが考えられます。本学では昨年度からビジネスアイデア・コンテストを開始し、令和4年度は「Z世代をターゲットとしたビジネス」をテーマに募集し、以下の応募案が受賞しました。

- ・最優秀賞「“チーム武庫女”で問題解決!『第2のお母さん』アプリを開発」
- ・SOAR賞「武道エンタメプロジェクトの開発ーなぎなたをエンターテイメント化する」
- ・優秀賞「『宅ポイ』～ストレスフリーな配達を～」
- ・企業賞(みなと銀行)「スタジオに来てもらうヨガへ会いに行くヨガへ」
- ・企業賞(阪神電鉄)「“チーム武庫女”で問題解決!『第2のお母さん』アプリを開発」
- ・奨励賞(3件)「～GO! KANZANJI～」、「スポーツで強くなりしたい子どもの教育ツール【b*f】(ビーエムエフ)～メタバースを取り入れた自己管理アプリ」、「自分だけの垢抜け参考書!『Iptom(イプトム)』他人(ひと)と比べないSNS」



◆ 連絡先：本館5階 社会連携推進課 安藤・大谷
◆ 内線：6212、6213 / E-mail: shakai@mukogawa-u.ac.jp